欅の木夜の声

井上靖

夜の声　欅の木

井上靖

新潮社版

夜の声・欅の木

〈井上靖小説全集30〉

昭和49年6月20日発行
昭和51年8月25日2刷

定 価850円

© Yasushi Inoue, 1974,
Printed in Japan.

著者 井上靖
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一 電話・業務部(〇三)二六六一五一一一、編集部(〇三)二六六一五四一一 郵便番号・一六二 振替・東京四一八〇八
印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

夜の声　五
欅の木　一六六
海の欠片　四〇二
訪問者　四一四
菊　四二三
岩の上　四三四
晴着　四四三
加茅子の結婚　四五三
自作解題　四六三

装画 加山又造

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

井上靖小説全集 第30巻

夜の声

一章

その朝、千沼鏡史郎はいつものように五時に眼覚めた。一昨年還暦を迎えたが、その頃から眼覚めの時刻は五時と一定している。前夜の就寝が早かろうと遅かろうと、翌朝はぴたりと五時に眼が覚める。

鏡史郎は床から離れると、まず縁側の雨戸を繰り、それから北側の窓の戸を開け、部屋に冷たい外気を入れてから、寝床を上げる。そして寝床を上げたあとで、枕許に散らばっている何冊かの書物を窓際の机の上に片付ける。これで八畳間の畳の上には一物もなくなるわけだが、これだけのことをしてから、鏡史郎は戸を開け放ってある北側の窓の前に立つ。これも毎朝のことである。鏡史郎の眼に、段々畑を載せて北方に下がっている広い台地と、その裾を走っている下田街道と、その向うに点々とちらばっている隣り部落の人家の茂りがはいって来る。この二、三年来、この田舎の街道にもバスや自動車の往来が烈しくなって、昼間そこに眼を遣ると、玩具のような小さい街道に、玩具のような小さい自動車の走っているのが見えるが、朝のこの時刻はまだ一台のくるまも姿を現わしていず、眼に映るすべてが早朝の冷たい空気の中に澄んでいる。鏡史郎は隣り部落の西の外れにある木立の茂みの上に眼を据える。晴れている日にはそこに小さい形のいい富士が姿を見せている筈である。

——ああ、今日は富士がきれいだな。

とか、

——ああ、今日は富士が見えないな。

とか、鏡史郎は毎朝のようにそのいずれかの感慨を心の中で洩らす。富士が見えたからどう、見えないからどうということはないが、この方は還暦以前から身についている日課である。若い時は富士が見えるとか見えないとかいうことに気を使った記憶はないから、恐らくこれは妻を亡くしてからのことであろう。妻を亡くしたのは五十三歳の時である。毎朝北側の窓の前に立つようになってから、いつか十年程になるわけである。

鏡史郎に、この朝、いつもと違ったところがあるとすれ

ば、多少期待を持って富士の方へ視線を投げたことである。今日だけは晴れていて貰わないと困ると思った。よほどの用事のない限り、めったに上京しないが、今日はその年に一回か二回の上京の日に当っていた。

空は気持よく晴れており、まだ上半身を白い衣で包んでいる富士が、青い裾を長く引いて見えている。雪のかぶり方の加減か、斜面の角度は少し鋭くなっている。鏡史郎は北斎の版画でこのような富士を見たことがあるように思った。

鏡史郎は縁側から庭へ降り、洗顔するために井戸のある背戸の方へ廻って行った。鏡史郎の部屋と書庫は別棟になっているが、それと一間ほどの短い廊下でつながっている母屋の方は、まだ戸を閉めたまま寝静まっている。

鏡史郎は井戸水で顔を洗った。四年前に狩野川沿いに散らばっている十幾つかの部落が一緒になって一つの町を作ったが、町制が布かれた時から、鏡史郎の住んでいる部落には水道が引かれた。どの家も台所を改造して、流しに水道の蛇口をつけた。その時から食事の後片付けのために、井戸端まで出掛けて行く女たちの姿は見られなくなった。食事の後片付けばかりでなく、洗顔も洗濯もみな水道の恩恵に浴している。大抵の家が、水道の出口を戸外にも設けていて、そこで洗濯をしたり、畑にやる水を汲んだりしている。

しかし、鏡史郎は毎朝、井戸の厄介になっている。ポンプの把手を上げおろしして、井戸水を古い金盥に受けて、それで顔を洗う。母屋の方がまだ起き出さないので、台所の水道は使うわけには行かないが、水道の水を使おうと思えば、コンクリートで固めてある洗濯場の水道を使うことができる。が、鏡史郎は顔だけは井戸水で洗わないと気がすまない。この井戸もいまは、ポンプで汲み上げるようになっているが、昔はもちろん釣瓶井戸で、鏡史郎の少年時代までは、毎朝のように、湿った釣瓶綱を、身体の重みをかけるようにしてたぐり、地中深いところから水を汲み上げたものである。その頃の釣瓶綱の冷たい感触は、いまも鏡史郎の手に残っている。

鏡史郎の一代にも、井戸は盛衰の歴史を持っているわけで、釣瓶井戸からポンプ井戸に変り、そしていまは、あってもなくても、さして痛痒を感じない存在になってしまったのである。

鏡史郎は、井戸水でないと洗顔した気持にならないが、それとは別に、誰からも見棄てられようとしている井戸に、自分だけは付合ってやろうという気持がないでもない。

鏡史郎は洗顔し終ると、毎朝のことであるが、コップ一杯の水を飲む。これは健康保持のためである。幼い頃父親

が毎朝水を飲んでいたのをふと思い出して、四十歳頃それを真似したのがきっかけとなって、それ以来、毎日欠かさないで続けて来ている。医学的に見て、それが健康にいいかどうか、そうしたことは判らない。

——井戸水は、時折調べてみた方がいいでしょうね。

子供たちが、時にそんなことを言うことがあるが、いつも鏡史郎は答える。

——父親がやっていたことなので、よくない筈はないだろう。

鏡史郎は何事につけても、七十歳で死んだ父親というものを、そのようなものとして見るようになっている。

井戸端を離れると、鏡史郎は背戸を歩いた。昔土蔵があったあとを花壇にしてあるほか、格別庭には作ってないが、背戸は二百坪程の広さがあって、この部落で一番大きい椎の木が東南隅にでんと坐っており、これもまた部落では一番大きい欅の木が、田圃との境に、いまは葉を持たぬ枝々を天に向って突き上げている。

鏡史郎はこの欅の木を仰ぐのが好きである。落葉している時は落葉している時で、芽吹き時は芽吹き時で、葉を繁らせている時は葉を繁らせている時で、何とも言えず美しく立派である。なかなか人間は、この欅ほどの貫禄を身につけることは難かしいと思う。大人物に対して、鬱然と大樹を仰ぐ思いがあるというような言葉を使うが、どうしてなかなか、容易なことではこの欅ほどにはなれない。

鏡史郎は欅を仰ぐのを手始めに、一本一本、背戸の樹木を見て廻る。朝の散歩と言いたいが、散歩ではなくて見廻りである。石南花、梅、躑躅、椿、そうした雑多な木を、何か変事は起っていないかと見て廻る。梅だけが白い花をつけている。梅は四、五本あるが、いずれも老梅である。昔は純白な花をいっぱい着けたものであるが、数年前より花は少なくなっており、しかも白さに微かに黄味をさして来ている。梅もまた老いると、花のつけ方に老化現象を見せるものとみえる。咲く時期も多少狂って来ている。昔は二月中旬に花をつけ、三月の初めには散ったものだが、いまは二月の終りに花をつけ、三月の中頃まで咲いている。それにしても、もう二、三日の生命であろう。

背戸をひと廻りすると、鏡史郎は縁側から上がり、寝室の隣りの書庫へはいって行った。鏡史郎も、家の者も、部落の人も、みんな書庫と呼んでいるが、別段特に書庫として造られた部屋ではない。畳の敷いてある十畳間で、鏡史郎の父の代までは専ら客用に使われた奥座敷であるが、いまは壁面全部に書棚が造られてあって、そとにぎっしりと夥しい数の書物が詰っている。寝室にも机が置いてあるが、この部屋にも、庭に面している側の一隅に机が一つ置

いてある。

来客の応接は寝室兼居間の方ですませるので、書庫にはめったに人は入れない。特に蔵書を見せてくれと言ってくる客は別だが、普通の訪問者の場合、汚れた手で書物を弄られたりするのが厭なので、なるべく書庫の方には招じ入れないことにしている。

従って、寝室兼居間の机は、机というより卓に近い大ぶりのもので、来客があると、それをまん中にして向い合って坐る。書庫の机の方は専ら鏡史郎の書見用である。毎晩、家に居る限り、夕食後から就寝までの時間を、鏡史郎は書庫の机に向って過す。

机の上には、硯箱、筆立て、インキ壜、灰皿、郵便物を入れてある文箱、文鎮、そんなものがきちんと、それがあるべき場所に置かれている。竹の筆立ての中には毛筆、万年筆、鉛筆、物指、拡大鏡、鋏、ペンナイフ、そんなものが入れられてあるが、朱筆用の筆も二本納まっている。そのほかに、机の上には孫のさゆりの写真が小さい額縁に入れられて飾られてある。これだけはちょっと場違いの感じだが、ひと月程前、長男の仁一夫婦がやって来た時、庭で撮ったもので、鏡史郎にとっては初孫である二歳四カ月の女児の顔が、余りよく撮れたので、あり合せの小さな額縁に納めたのである。

机の前には座蒲団、その横には桐の胴丸の古火鉢がある。若い連中が石油ストーブの使用を勧めるので、むげには拒否しかねて、居間の方では使っているが、書庫の方には持ち込まない。小さな火鉢に手をかざすことで我慢している。今年の冬も風邪をひかなかったくらいだから、若い者たちがわいわい騒ぐほどのこともない。

鏡史郎は書庫の空気を入れ替えると、これも毎日のことであるが、書棚をぐるりと見廻して、ここでも異変があるかどうかを確かめる。異変のあろう筈はないが、一応そういう気持で見廻さないと、心が落着かない。

書棚に詰っている書物は、ことごとく『万葉集』関係のものばかりである。小学校の平教員をしていた三十歳の頃から集め出し、それから今日までに三十年以上になるが、今だに月に二冊や三冊は増えている。凡そ『万葉集』という名がつく限り、研究書、解説書は勿論のこと、素人向きの写真集、紀行集、中学生向きのものに到るまで、一応全部集めることにしている。紙不足の戦中、戦後の一時期はさして神経を使うことも要らなかったが、昨今のようにめったやたらに書物が出始めると、万葉関係のものでも出版されない月はないと言っていいくらいである。新書判の形で出たり、文庫本の一冊として出版されたりするので、新聞の広告も注意しなければならぬし、読書欄にも、眼を通

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

さなければならぬ。

寄贈本も多少はあるが、その数は知れたものである。東京に出ている子供たちも注意して、新しい書物が出ると、すぐ報せてくれるが、しかし、何と言ってもひとごとなので、本人が気をゆるめるわけには行かない。

鏡史郎は新聞を三種とっている。いっさい無駄なことは嫌いな性分だが、新聞だけは無駄を承知で、三紙を配達させている。これに彼が三日にあげず顔を出している役場でとっている二紙を合わせると、大体、これで中央紙に出る万葉関係の随筆や論文は逸することはない。万葉関係のものは地方紙に出ることも多いが、この方は同じように『万葉集』に夢中になっている地方の素人研究家たちが報せてくれたり、掲載紙を送ってくれたりする。雑誌の方は、新聞の広告で見て、万葉関係のものが執筆されてあるものだけを、沼津の書店から取り寄せることにしている。書物の方は入手したら書棚に並べるだけで事足りるが、新聞の論文や随筆となると、糊と鋏の作業を要する。そうしたものを貼り込んだスクラップが何十冊かになっている。

何分三十年余にわたる蒐集だから、多少自慢できるものがないでもない。俗に慶長本『万葉集』と呼ばれている江戸初期の古活字本など、その一つである。全部で二十巻あるが、二巻ずつ綴り合せた十冊が帙の中に納められてある。もともと百部ぐらいしか刷られていないもので、それが長い歳月の間に数少ないものになってしまっている。

それから、北村季吟の『拾穂抄』の木版二十冊も、鏡史郎のこの書庫にはいっている。これは『万葉集』全二十巻に初めて頭註をつけたもので、万葉研究史上重要な業績の一つとされているものである。最近復刻版を出す話が持ち上がっているが、今のところまだ出ていないので、個人の蔵書としては珍しいものに入るであろう。

慶長本『万葉集』は万一の場合を慮って、いつでも運び出せるように、机に近い場所に置かれてある。

二、三年前のことだが、国文科を新設するという地方の某大学から、慶長本『万葉集』を譲って貰えないかという交渉を受けたことがある。鏡史郎の尊敬している東京のT大学の柳沢博士の紹介だったので、鏡史郎も懇請されれば、手放さなければならなくなるのではないかと思っていたが、結局これは断わってしまった。交渉に来た若い講師が、普通の古本でもめくるように、ばらばらと頁をめくり、いきなり、

「一体、いくらで譲ってくれますか」

と切り出したので、鏡史郎は腹を立ててしまったのである。大体稀覯本の取り扱い方を知らない。押し戴かないまでも、指の脂をつけないぐらいの注意はして頁を開き、義

理にも珍しいものを見せて貰う悦びと感動を顔や態度に現わすべきである。それが所蔵者に対する礼儀でもあれば、その書物に対する礼儀というものでもある。書物はどんな書物でも生命を持っている。殊に稀覯本となると、それが今日まで生き永らえて来た歴史というものは、ひと通りのものではない。

鏡史郎はその時、若い講師に言った。

「柳沢先生からもお手紙を頂戴してあったので、これはお譲りしなければなるまいと、あなたのお顔を見るまでは、そう考えていました。しかし、いまは考えを改めました。お譲りするわけには行かない。この書物が今日ここまで生き延びて来たのは、代々の所蔵者たちのこの書物に対するなみなみならぬ尊敬と愛情のためである。恐らくどの所蔵者も、虫に食わせまい、火災にも遇わせまい、雨漏りのしみもつけないようにと、この書物のために、いろいろと気を使って来たのである。この書物は京都の素封家にあったものであるが、所蔵者が他界したあと、所蔵品を売立てるということを聞いて、私が出掛けて行って譲って貰ったものです。その家でも他の骨董品は売立てに出すが、これを出す気はないということだった。ところが私が余り熱心だったので、それではということで、詰りあなたのような人に持って戴ければ、亡くなった所蔵者も満足だろうということで、買入れた時の値段そのままで譲ってくれたものです。私はこの書物を入手するために三回も京都へ行っています。本というものは、このようにして譲られ、このようにして手に入れるものです。一体、いくらで譲るかと言われても、それでは困る。こうしたものには値段はない。人間の心から人間の心へと譲られるものです」

柳沢博士の方には、事の顚末を述べ、鄭重な詫び状を認めた。折返して博士の方からも詫び状が来た。

慶長本『万葉集』は骨董的価値をも持っているものであるが、北村季吟の『拾穂抄』を初めとして、そのほかに、いまは古本屋でも入手し難くなっている江戸、明治期の万葉研究書や辞典類など、一応書棚のどこかに顔をのぞかせており、個人の蒐集としては誇ってもいいものではないかと、ひそかに鏡史郎の自負するところである。

鏡史郎は田舎の中学校を出て、代用教員として村の小学校に奉職したのを振り出しに、一生を小学校教員として過し、半島の基部にある三島市在の小学校の校長を勤めたのが、双六で言えば上がりである。中学校時代は上級学校へ進む志望を持っていたが、中学卒業前後から脚気を患い、そんなことからほんの腰掛けのつもりで村の小学校へ勤めたのであるが、それがとうとう一生そこから足を洗えなくなってしまったのである。小学校は幾つか転じたが、いつ

も半島内の小学校ばかりで、任地が郷里に近いというのんきさもあり、児童教育という仕事も、やってみると、他の仕事に替えられぬ面白さのあることも判って来て、鏡史郎はいまも一生教員として過したことを、少しも後悔はしていない。充分充実した一生の過し方だったと思っている。

それに、万葉に打ち込むことのできたのも、小学校の教員をしていたお蔭であり、これが他の職に就いていたら、経済的な面はともかくとして、そんな時間的ゆとりがあったかどうかも判らないし、第一そんな気持になれたかどうか、甚だ怪しいものである。

万葉に取り憑かれたのは小学校へ勤めて十年ほど経ってからで、一流万葉学者の研究書を手当り次第読んでいるうちに、学者になろうなどという野心は持てよう筈もなかったが、たとえいかにささやかでも、自分は自分なりの研究ができるのではないかと思った。静岡県下だけでも、万葉の歌は五十七首読まれている。大部分が東歌、防人関係のもので、概して無名歌人の所産であるが、そうしたものを対象として、地方的研究を纒めることができたら、さぞかし本望であろうと思った。

そんなことから、『万葉集』関係の書物を蒐め出し、結局のところ、研究の方はいっこうに捗々しく進まず、いつか立ち消えになってしまったが、蔵書の方は年々歳々多くなり、次第に研究より、蔵書を増やす方に情熱を傾ける結果になってしまった。本末顚倒してしまったわけであるが、これも、まあ仕方がないと、いまの鏡史郎は諦めている。従って、万葉関係の書物の蒐集家ではあるが、単なる蒐集家とは違って、鏡史郎の場合、入手した書物を、書棚に並べる前に必ず眼を通す。従って最も正確な言い方をすれば、趣味の万葉研究家であり、読書家であり、蒐集家であるということになろうか。

鏡史郎は校長時代は、〃万葉校長〃として、地方新聞に何回か紹介されたことがある。そんなことから郷土史家仲間に入れられており、時折、地方の文化団体のようなところから万葉についての講演を依頼されたり、同人雑誌から随筆を頼まれたりする。講演の方はめったに引き受けないが、原稿の方は、なるべく気やすく書くようにしている。一度だけ東京のちゃんとした短歌雑誌から原稿の依頼を受けたことがあり、それに載った文章が意外な反響を呼んで、一流学者からお褒めの言葉に与り、大いに気をよくしたことがあるが、こうしたことは、あとにも先にも、一度だけである。

目下のところ、〃万葉校長〃は、〃万葉町長〃になっている。実際は町長をやめているが、町長時代の呼称がいまだに使われているのである。三島市在の小学校長を最後に教

員生活から足を洗った時、鏡史郎は父が一生を賭けた山葵栽培の仕事を、おくれ馳せながら受け継いで、それに依って余生を送ろうと決心したのであるが、郷里へ引込むと間もなく、むりやりに引張り出された恰好で村長役を押しつけられ、約束の一期を勤めあげたあと、村に町制がしかれて、町長としてまた一時期勤めさせられ、漸くにして去年の暮、健康上のことを理由に自由にさせて貰ったのである。

これから念願の山葵栽培の仕事に取りかかるわけだが、もう暫くは町長時代に関係した仕事のひっかかりで、何かと役場に顔を出さねばならない状態にあった。

山葵栽培の仕事は、亡き父の業を継ぐことでもあり、教員時代を通じて持ち続けていた夢でもあるので、母屋の方に住まわせている蛯夫婦に自分に替って毎日の見廻りの役をやって貰っている。さして多くはないが、天城の峠近い場所に父から譲られた二反歩程の山葵沢があり、教員時代はひとに貸してあったが、それがいま鏡史郎の手に戻っている。万事ひと任せで、高い労賃も払わなければならぬが、書物を購入する費用なども、そこから得ることができる。

鏡史郎はたまに山葵沢を見廻る。山葵というものは、きれいな水でないと育たない。しかも、夏も冬も、水量、温度ともに差のないことを条件としている。湧き出したばかりで、汚れのはいっていない水がいい。なかなか気難かしい植物だが、その気難かしさも、鏡史郎には気に入っている。栽培は畳石式を採用している。深さ一メートルぐらいの底に大きい石を並べ、その上に中ぐらいの石、更にその上に砂利、そして一番上に十五センチぐらいの厚さに砂を敷く。そこに山葵を植え、清水が絶えずそこを流れている。山葵沢は、水の流れ落ちる方向に、何段かに作られている。奥深い天城の山襞に階段状に作られている山葵沢を見ると、鏡史郎はいつも、身も心も清まる思いがする。

書棚の書物と書物の間に、白い紙きれの挟んであるところがある。誰かに貸し出して、そこだけ並ぶべき書物が欠けているところである。挟んである紙きれには、貸し出した日と、貸し出した相手の名前が書き込んである。このくらいにしておかないと、書物というものは、いったん書庫から出て行くと、なかなか所有者の手許には戻って来ないものである。

最近、万葉町長の出た町らしく、町役場の吏員や、町の小学校や中学校の教員たちの間に、万葉を読んだり、研究したりする者が何人か出て来て、そんな連中で、万葉研究会のようなものが生れており、鏡史郎も時折、そこへ引張り出される。そうした集りができたことは結構だが、その連中に書物を借り出されることには閉口する。貸してやらないわけには行かないが、汚される心配もあれば、紛失さ

れる懸念もある。とは言うものの、あの本を読めとか、この本で調べろとか、指導したり、煽動したりするのは、鏡史郎自身に他ならぬので、一概に人ばかり責めるわけにも行かない。

「お早うございます」

庭の方から、母屋の甥の嫁の三津子が顔を出した。沼津の商家の出であるので、部落の他の内儀さんたちのように畑仕事はできないが、明るくて素直なのは取柄である。嫁に来て五年になるのに、まだ子供ができないということで肩身が狭いらしいが、それもまあ仕方ないことであろう。鏡史郎は、この甥の嫁を、自家の嫁同様に取り扱っている。世話もし、世話にもなっている。本当の嫁は長男の仁一の妻の信子であるが、この方は結婚以来ずっと東京に住んでいて、一緒に暮したことはないので、嫁とは名ばかりで、世話になることもないし、世話をやくこともない。

「いいお天気で結構でした。折角、東京にお出になって、さゆりちゃんにお会いになるというのに、雨でも降ったら鬱陶しいと思っていましたが、それが、こんないいお天気になって」

「さゆりに会いに上京するわけではない」

訂正すべきことは訂正しておいて、

「あさって帰って来るので、今日と明日、二日家をあけることになるが、留守は頼むよ」

鏡史郎は言った。そして、

「辰造は起きたね」

鏡史郎は甥の辰造を、子供同様呼び棄てにしている。辰造とは山葵沢の仕事で打合せておくことがあった。そろそろひとを入れなければならぬ時期になっている。

「辰造に、ちょっと頼んでおくことがある」

鏡史郎が言うと、

「今日から山葵沢にひとがはいると言って、いま出掛けたところです」

三津子は答えた。

「朝飯も食べないで行ったのか」

「あのひとは、いつも朝御飯を食べたり、食べなかったりです」

「いくら忙しくても、食事というものは、三度三度、きちんととらんといかんな」

本当なら、きちんと食べさせなければいかんなと言うべきであったが、辰造の方は身内で、嫁の方は他人だから、鏡史郎は多少言い方に気を使っている。

「何時のバスでお出掛けになりますか」

「そうだね。十時のに乗れたら乗りたい。その前に役場にちょっと顔を出して、打合せしておかねばならぬことがあ

る」

鏡史郎は言った。実際に打合せしておかなければならぬことは幾つかあった。町有の天城続きの山にゴルフ場を作りたいからと、その相談に某映画会社の幹部がやって来ることになっていた。それに応ずる応じないは別にして、熱心に面会を申し込んで来たので、会うだけは会って話を聞いてやろうという気になって、上京を見合せていたのであるが、約束の日が過ぎても、いっこうに相手は姿を現わさなかった。こういうところは都会の事業家の嫌いなところである。先方も忙しいには忙しいであろうが、こちらも決して忙しくないわけではないのである。それが、昨日になって、近くお伺いするといったような手紙を寄越している。〝近く〟とは何事であるかと言いたい。来るなら来るで、はっきりと時日を示して来るべきである。

それから、中学校の校舎の建増し問題、自動車にはねられた子供の慰藉料請求の問題、町から出す木材の宣伝パンフレットの原稿紛失事件、それに部落と部落のつまらぬもめごと、その調停の問題等々、そうした自分の町長時代にもち上がった問題で、今日まで未解決のまま持ち越されているものに対しても、自分の留守中の手配だけは、一応しておく必要があった。

鏡史郎は書庫を出ると、もう一度庭に出て、序でに眼にはいった雑草を二、三本引きぬき、それから朝食をとるために、母屋の方へ歩いて行った。書庫からでも、居間からでも、廊下伝いに母屋へ行くことができるが、雨降りでない限り、鏡史郎は庭伝いに行くことにしている。渡り廊下を通ると、否応なしにそこから、部落の外れにできた青ペンキで屋根をあくどく塗ったガソリン・スタンドの建物が見えるからである。自分にはそうした色の屋根を禁ずる権限もなかったし、何しろ気付く暇もなく、あっという間に、それはできてしまったのである。鏡史郎はなるべくそれを見ないことにしている。

鏡史郎は母屋の土間へはいり、上がり口の広い板敷の部屋へ上がった。父の代には、ここにたくさんの山葵が持ち込まれ、村の内儀さんや娘さんたちの手で、葉がむしられたり、茎がむしられたりしたものだが、鏡史郎の代になってからは、そうした情景は見られない。

いまは板の間の半分には畳が敷かれている。板の間の方には籐椅子のセットが置かれ、畳を敷いた方は居間に使われている。奥に座敷と納戸があるが、この方はいずれも暗くて、使いものにならず、座敷の方だけが辛うじて甥夫婦の寝室となっている。

鏡史郎は食事の時はいつもこの母屋の板の間に造られている居間にやって来、甥夫婦と一緒に食卓を囲む。そして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.